

帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！ ソ連・スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命・世界プロ独立・共産主義を組織する世界唯一の国際階級闘争の最前線に創始せよ！

会員の内容	国鉄分割・民営化攻撃と対決し 国鉄労働運動再生の進路を開け 天皇行事粉碎闘争アピール 沖縄闘争学習資料(第3回)	1986年 10月30日 第375号 編集発行人 高木一夫 一部 200円	火炎ノ NOROHI	共産主義者同盟（全国委員会） ■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31 とみやビル15号 Tel(06)371-3706 ○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫 ○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
	P2~5 P6~7 P8~9			

国家秘密法を許さない 全関西実行委結成さる

去る十月二〇日、国家秘密法を許さない全関西実行委員会結成会議が開催され、二八団体の参加をもって実行委の発足がかちとられた。事務局長には岸田早苗氏が選任された。十一月にはじまる通常国会に国家秘密法の再上程が予想されるという切迫した情勢のなかで、全関西実行委は秘密法反対闘争の大衆的高揚を創出すべく結成された。

帝国主義的労戦再編

攻撃とたたかう全金京滋地本規別共闘会議、洛南労働組合連絡会議、全日建連労組近畿地本、自立労組連合などをはじめとした階級的労働組合・労働団体、大阪、京都、滋賀の刑法改悪、保安処分新設などにた

いして反対運動をつづけてきた反弾圧諸団体、反天皇制のうねりを！関西連帯会議、京都「天皇制を問う」講座実行委などの反天皇制諸団体、さらには全国労働者政治委員会、プロレタリア行動委（準）、同志社大学全學戦線など先進的労働者・学生の活動家組織、そして多くの良心的・文化人の賛同人によって構成されたこの全関西実行委は、必ずや日帝・中曾根の国家

秘密法制定策動にくさびをうちこむ大衆運動をつくりだすだろう。実行委では秘密法再上程阻止にむけて十
一月二十四日に大阪で大規模な集会を成功させていくた
めの活動を開始している。

国鉄・秘密法軸に総決起を



9月29日、京都で国家秘密法粉碎のデモをたたかいぬく全国労政、洛南戦労研、自立労連タカラブネ労組青年部の部隊。秘密法阻止の全国的運動の先頭に青年労働者の姿を！この日の闘争はその宣言と第一歩である。隊列を増強し進撃せよ。

党と労政建設の前进力ちどれ

国鉄闘争もいよいよ最大の山場を迎えるとしている。国鉄分割・民営化関連八法案は臨時国会で可決強行されようとしている。分割・民営化攻撃は日本労働運動に壊滅的打撃を与えるようとする攻撃であり、絶対に許してはならない。国労大会では民同山崎執行部の全面屈服路線が否決されたが、協会派、日共に現在の困難な局面を階級闘争の前進と結びつけて切りひらいていく力はない。国鉄労働運動はいま大きな危機にたっている。十一月闘争を国鉄分割・民営化粉碎、国家秘密法上程阻止闘争を中心にして組織し、プロレタリア政治闘争の前進をかちとろう。

共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706
○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

マル生闘争の勝利（中労委による不当労働行為の認定・命令）、七五年ストライキへと登りつめていった。

国労が総評労働運動＝日本型戦闘的労働組合運動のなかで、最左派にして最強の労組として

分割・民営化の真のねらい

国労・支那労働のたたかいで

国鉄労働運動は日本階級闘争史上、大きな戦略的位置を占めてきた。一九四六年の国鉄労組総連合結成以来、戦後革命期においては、国鉄が日本資本主義の直接的命運としての戦略的位置をにぎったがゆえに、下山・三鷹・松川事件（四九年）などの多くのフレーム・アップをふくむ攻撃を受けながらも、国鉄労働運動はたたかいぬかれてきた。

国鉄・分割民営化を通じた国鉄労働運動へのすさまじいばかりの組織破壊攻撃がかけられている。

◆最強労働組合の解体

の位置をもつた理由は次のものである。第一に労働組合組織の各単位での強さである。国労は総評労働運動の伝統、三井三池労組などに示された現場大衆実力闘争主義を継承し、たんに労組中央に力が保持されているだけでなく、職場の基礎単位に力を蓄え、その結果として全国の地方・職場ごとに多数の職場活動家をつくりだしてきただ。層として形成された職場活動家と、

彼らによる現場での大衆的実力闘争の実践が、組合主義的政治闘争の枠内ではあれ、国労は総

◆利益は大資本が独占

国鉄分割・民営化のいまひとつ的一面は、より多くの利潤を求めてのブルジョアジーによる産業構造の再編と大衆収奪にある。

日本資本主義にとって国営鉄道事業は、他の



民同執行部は追放されたが…(国労大会)

国鉄分割・民営化をめぐり、敵ブルジョアジーの大反動攻撃が、すべてのプロレタリアート人民にかけられてきている。国鉄分割・民営化を通じての国労つぶしは、国労内「左派」（協会派、日共＝革新）排除にとどまらず、すべての階級闘争組織を壊滅し、戦争とファンズムの道へ労働者人民を総動員しようとするための、日本帝国主義による最後的攻撃のはじまりである。

日帝の戦後支配の相対的安定期を支えた基本的構造（五五年体制）が、いま竟をたてて崩れざるなかで、労働運動の産業報国会化＝帝国主義的労戦再編にむけて、総評に代表される日本型戦闘的労働組合運動の再生の芽を根底的にみとろうとする攻撃が、今日の国鉄解体攻撃にほかならない。そしてこれは確実に全労働戦線に波及していくのである。

われわれは戦後労働組合運動を支えた総評労働運動の最終的解体過程において、その最強の部隊であつた国鉄労働運動の総括をなしきり、日本階級闘争の新たな前進をさりひらかねばならない。

資本主義国に比して特殊な位置をもつてきた。

日本資本主義はその島国としての地理的条件、後発の資本主義としての経済的条件のなかで、一八八五年に鉄道の強引な国有化をおこないつつ、産業発展の動脈、流通の環として鉄道網を建設してきた。また第二次帝国主義戦争の敗北以降は、日本の支配者階級は日本資本主義の復興の支柱として鉄道網を整備・強化してきた。日本の鉄道は、アメリカにおいて鉄道が衰退し空路やバスにとってかわられたことや、ヨーロッパで国境線が存在することによって鉄道の発達が阻害されたことに比べて、特殊な発展をとげたといえる。

しかし日本ブルジョアジーは六〇年代に入るや、次代の基幹産業として自動車産業を育成するため、鉄道網整備に関する方針の転換をはかっていく。すなわち、道路網建設にばう大な社会的資本を投下し、経済的物資輸送の主な手段をトラックへと転換し、他方で鉄道の性格を旅客輸送に主力を置くものへと転換したのである。そしてこのもとで鉄道整備の中心を、巨大都市間の大量高速輸送網（新幹線など）と巨大都市近郊電車網の充実にむりむけてきた。

国鉄の巨大な「赤字」（昨年国鉄再建監理委が発表した最終答申においては青函トンネルや本四架橋などの資本費込みで長期債務は三七・三兆円になるとされている）は、この過程での急速かつ巨大な設備投資によって生まれた。毎年総資産の一〇%以上の投資を借入金によってまかなったことの結果として、運賃収入の七割にものぼる元利返済（八三年度で一兆七八〇億円）と債務の累積（七〇年度に一兆六千億円にすぎなかったものが八四年度には二兆円に急増）が不可避となつたのである。ブルジョアジーはみずから意図的につくりだしてきた「赤字」を、分割・民営化を機にプロレタリアート人民に全面転嫁しようとしている。再建監理委の答申では、「旧国鉄」が引きつぐ長期債務の

ブルジョアジーの総意であった。

ブルジョアジーは今日本格化する国労攻撃を巧妙な多段階戦術をもつて準備してきた。八〇年に入ってからの行革キャンペーン、それにつづく官公労働者へのいっせい攻撃の開始のかで、国鉄労働者にたいしては職場の戦闘力の解体にねらいを定めて「国鉄現場の荒廃」「ヤミ給与、ヤミ休暇」「国鉄職員のたるみ」などのキャンペーンが激しくおこなわれ、八一年十二月にはついに国労とのあいだで結ばれていた現場協議制の協定が一方的に破棄された。攻撃は国鉄の労使問題の枠をこえ、当事者能力をはぐ奪したうえで、自民党三塚委員会による直接介入をもつておこなわれた。そして現協定破棄につぐ次の段階として、八五年十一月には国労にたいしてのみ雇用安定協定を破棄していくという攻撃にいたるのである。

分割・民営化 国鉄労働運動

国鉄労働運動 の歴史的限界

国鉄再建を大義名分にしてもちだされた国鉄分割・民営化の最大の政治的意図が、国鉄労働運動の壊滅、とりわけ最大労組の国労の解体にあつたことは、今日ますますはつきりしてきている。

国労への攻撃は容赦ないものであり、国鉄の民営化のみならず、支配者階級の内部にも反対があつた分割案を強行しようとする背景には、国労をバラバラにしてつぶすというブルジョア

うち一六・七兆円は返済のための財源がない、すなわち人民への直接負担によって処理するとされているのである。

国鉄分割・民営化はブルジョアジーの利益のための運輸・交通網再編の環であり、負担や不利益は人民に強い、うまみはブルジョアジーが独占するという大衆収奪の攻撃でもある。分割・民営化にともなつて、北海道、九州、四国を中心とした赤字ローカル線の切り捨てがすすみ（鉄道事業の公共性の否定）、巨大な土地資産の独占資本への売り渡しがおこなわれ、六分割された旅客鉄道会社では会社発足後ただちに運賃値上げが予定されている。これが「国鉄再建」の真の姿なのである。

国労の策謀が存在しているのだ。「臨調路線の最大のねらいは国労つぶしにあった。電電、専売公社が分割されず、国鉄は分割というのもそのための戦略」（運輸相経験のある自民党議員の匿名発言）なのである。

臨調の行革最終答申がだされる前年の八二年段階では、国鉄当局の態度は「民営化もむなし、分割反対」であった。中曾根はこれを強引に変更させるため、仁杉から杉浦へと国鉄総裁の首のすげかえをおこない、分割への内部固めをはかつた。中曾根は国労のような巨大で職場に力をもつ労組を解体するためには、たんに企業内の条件の変化のみでは不足であり、古くは電産労組や炭労解体のように大きな産業再編をふくむかたち以外では不可能だという信念にもとづいて、少々の抵抗は排除して分割攻撃にでてきたのである。もちろんそれは広い意味でブ

◆敗北を準備した民同

「親方日の丸の甘え」「民間企業なら倒産」「企業あつての労働者」「雇用こそ第一」という国鉄「赤字」キャンペーンから開始された国鉄労働運動への攻撃は、その戦闘性を解体して労働者の資本への完全な屈服を要求する攻撃である。それは六〇年代初頭から民間大企業において、同盟やJCCを使ってくりかえしあしなわってきた戦闘的労働組合にたいする攻撃と、多

くの点で共通するところがある。しかしその規模の大きさや周到な準備という点、すなわちブルジョアジーの総力をあげた組織破壊攻撃であるという意味においては、近年まれにみる歴史的攻撃なのである。

◆社会主義は掲げたが

総評の最強の部隊であった国鉄労働運動もこの攻撃にいまや膝を屈しつつある。それは六〇年代を通じて総評傘下の国鉄労働運動が、激しい組織解体攻撃をかけられつつも、「公社」ゆえに「失業か雇用か」という問題に逢着することもなく、今回のような雇用問題を前面におし立った攻撃にたいし未武装であったということに理由のひとつはある。しかしそれは一面であつてより根本的な理由は、敵階級が雇用問題のみならず、いわば資本主義そのものの存続が否定か正面から問う階級的攻撃をかけてきたとき、総評の戦闘的労働組合運動を代表した国鉄労働運動もまた、これに真に階級的な反撃を組織できなかつたという点にこそあるのである。その責任はあげて国鉄民同の指導にある。労働組合の団結の基礎を職場、直接的生産過程における労働と資本の矛盾にのみ求める経済主義と、労働組合を階級の第一次団結体、階級闘争組織としてとらえず、結局集票機構として位置づける議会主義を本質とする国鉄民同の誤りが批判されねばならない。

直接的生産過程の労働と資本の矛盾に階級対立と階級支配のすべてをみる狭い資本主義批判のうえに立って彼らは、この矛盾を解決するものとして「社会主義」を標榜してきた。しかし彼らのかかげた社会主義は理の当然のことながら、権力奪取、プロレタリア独裁の樹立、共産主義の実現を意味せず、本質的に社会改良、資本主義の改良を求めるものでしかなかつた。そして彼らは（協会派も含んで）この彼らの流の社会主義実現のプログラムを平和ゼネスト革命路線に求め（もちろんここでいう革命とは社民政権の成立にすぎない）、当面は議会主義政党を育成し影響力を強め（選挙活動）、市民の議会活動をバックアップするための院外圧力行動に労組員を動員する（政治闘争）ことを労組指導の方針としてきた。彼らはこのなかでもうひとつ反階級的な誤りを犯した。労働組合の物神化、政党にたいする労組の優位という転倒である。前衛政党の根本的否定、このことが国鉄労働運動の企業内戦闘性を階級的に止場・発展させていくことを阻害し、決定的な段階で転向、寝返り、逃亡、敗北をみぢびくこととなつたのもとも大きな要因なのである。

現在の国労が直面する事態もまた、以上のようないくつかの誤りによってつくりだされたものである。国労は日本の大単産労働組合運動のなかではもともと近くまで職場組織を堅持し、現場大衆実力闘争主義をつらぬき、戦闘性を保持してきた例外的な労働組合である。国労の現場には全国で数万人におよぶ活動家群が形成されてきたし、さまざまな党派の活動家も存在してきた。しかしすでに国労民同は敵への屈服を公然と表明し、民間にかわり指導部の位置についた「左派」（協会派、日共）も有効な反撃を組織しえ

ていない。いまや国労は最大の危機に立たされている。すべての先進的労働者、とりわけ国鉄内のたたかう労働者は、国労民同（協会派）の経済主義、議会主義、解党主義を批判しつつ、

国鉄労働運動の階級的再建をかけて、国労の歴史的限界を突破するたたかいに起ちあがらねばならない。

われわれは国労の限界を次の三点においてとらえ、これを突破していくことを呼びかける。

第一は自覚される企業内組合主義である。

それは結局、企業内の運動の枠を意識的に打破しようとするものではなかつた。

第二は活動家形成における一面性である。国労が職場闘争を通じて大量の活動家を輩出したことは何度もべた。しかしこうして形成された活動家群は雇主（当局）との実力闘争部隊の質にとどまっており、他の階級闘争に連帯するという側面では十分にうち鍛えられなかつた。

第三はその労組闘争力そのものがもつた質的限界である。国労が誇った労組闘争力は広く階級闘争の発展のために解放されず、民同指導部のもとで社会党の尻押しのための対政府圧力手段へと歪曲され、労働組合として必要な力の一一面にすぎない対政府交渉能力へと狹められた。

以上のような歴史的限界を突破することは、国鉄分割・民営化阻止闘争の不可欠の課題である。

◆動労の恥ずべき転向

国鉄労働運動の存亡の危機のなかで、いち早く当局にすり寄り転向していくのが革マル派に牛耳られた労働であった。われわれは労働と革マル派の反階級的行動を絶対に許してはならない。

彼らは七二年から七五年にかけての総評交運ゼネスト路線のなかで、職場での「突きあげ」「反合闘争の徹底化」を主張してきた。そして民間にたいする「左バネ」として、この時代「鬼の労働」の実働部隊として存在した。

だが彼らは連合主流派から単独主流派へとのしあがる過程で、この方針の転換をはかつていく。八一年の「ブルー・トレンイン事件」を契機に決定的に強まつた国鉄をめぐる社会的キャンペーンのなかで彼らは、時代を「冬の時代」と規定し、国労、労働、全施労、全労働によって構成されていた四組合共闘から労働を脱落させ、国鉄労働運動の防衛戦への突入の局面で、

担当にほかならない。



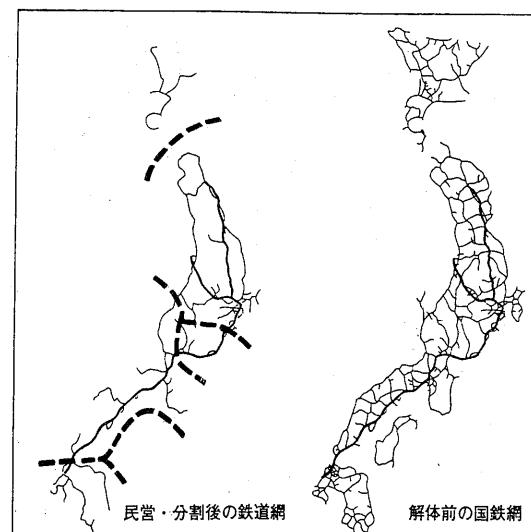
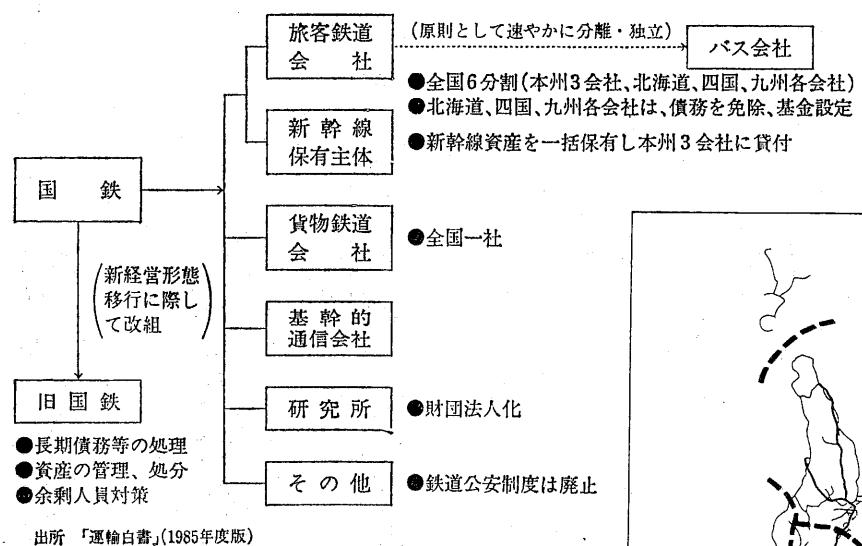
革マル派がでっち上げた分裂組織
＝真国労の結成大会（本年4月）

革マル派はその路線から労働組合運動を「本来の戦線」として、特別の意味をもたせてきた。そしてそのことの実際上のあらわれは徹底した本工主義、経済主義であった。この点では彼らは、最終目標を革マル組織建設におき、資本主義にたいする批判を革マル組織そのものの物神化へととりかえるという特徴をもつておらず、ここから特別の反階級性が生まれるのである。

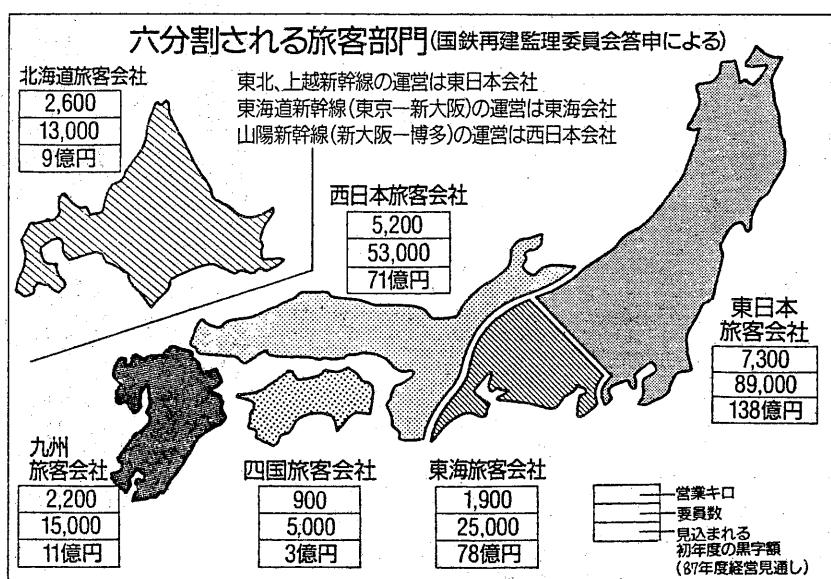
このかんの革マル派機関紙「解放」の「労働労働運動の終えん」「ネオ・ファシズム下の労働運動の開始」という主張は、彼らの事態認識をよくあらわしている。すなわち「労働労働運動の終えん」とは、その「戦闘的」戦術形態が終つた（とりえなくなつた）ということであり、「ネオ・ファシズム下」で新しい戦術形態への移行が開始され、その戦術目標の帰結は究極目標としての物神化された革マル組織を温存していくこと以外にはないといふのである。彼らにとって新しい組織戦術形態への移行として、現在の労働の転向はあるのである。

彼らはこの方針のもとで、きわめて許しがたい反階級的行動をとっている。「雇用第一」への反動的転換のなかで、みずから第一義の実践的任務を労働の解体に定め、自己の組織拡大・労働・真国労の拡大に奔走している。それは日本帝国主義による本格的な階級闘争破壊攻撃の開始への迎合であり、この攻撃への積極的

分割・民営化で国鉄はこうなる――



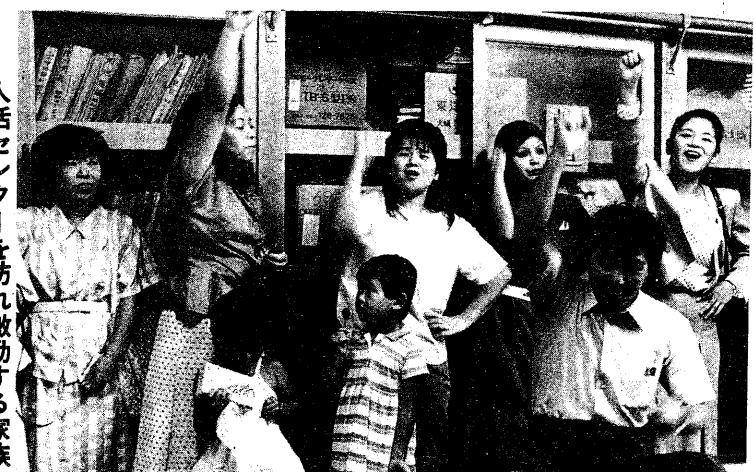
ローカル線の切り捨ててもすすむ



国鉄闘争は現在重大な局面を迎えており、このたたかいの帰結は、労戦の産報化に抗し、日帝の戦争とファシズム攻撃と対決するプロレタリアートの階級闘争陣形を構築するたたかいの前進にとって、大きな意味をもっている。われわれは現在の国鉄闘争が十月の国労大会にみられたような一定の流動を示しながらも、いよいよ最終局面に突入したことを確認せねばならない。いまこそ日本プロレタリアートの良心をかけてたたかぬこうとする全国に散在する国鉄労働者、活動家との共闘を広範に組織し、反撃のために決起するときである。

十月九日から開かれていた国労の臨時大会では、労使共同宣言の締結や不当労働行為の提訴取り下げなどを含んだ執行部提案が、賛成一〇一、反対一八三、保留一四で否決され、山崎執行部（民同派）は総辞職し、かわって非主流派（協会派）、反主流派（日共＝革同）の連合による六本木新執行部が誕生した。一六日には民同派は「社会党・総評を支持する国労全国連絡

協議体」を結成し、国労は事実上の分裂状態となつた。国労大会における劇的な執行部の交代は、「雇用確保・組織防衛」を大義名分にして全面屈服路線へと国労を引きずりこもうとした民同執行部にたいする、組合員大衆の怒りの反



映であった。しかし「左派主導の新体制」といわれる連合勢力もまた、当局のしめだし攻撃をうけて現状とりあえず強制された抵抗の姿勢を示しているとはいえ、その本質からしていったかいの旗を降ろしても不思議ではない。なぜなら彼らは国労解体攻撃に対処できないからである。協会派、日共＝革同に、国鉄労働運動の総括とその階級的再生を期待することはまったくできない。

われわれは国労内全国数万の活動家と連帯し、国鉄労働運動の戦闘的伝統を、階級闘争の発展へ正しく引きつぐたたかいを開拓しなければならない。全国で人活センターに配置されつも最後までたたかいで起きたんとする労働者群を支援し、新しい階級闘争陣形の構築にむけ、広範な共同実践を積み重ねていくなかでそれはたたかいとられる。

国鉄労働運動の危機をまねいた眞の前衛党との指導の不在という否定的現実をうち破り、日本労働者階級の未来をかけて、国鉄分割・民

戦争とファシズム

準備の決定的攻撃

四月二九日におこなわれた政府主催の天皇在位六〇年式典について、十一月十日を中心にして全国各地で奉祝式典や奉祝パレードがおこなわれようとしている。天皇ヒロヒトの在位六〇年とは、わが国の人民が天皇と国体護持の名のもとに、アジアへの侵略有貢され、階級闘争と共に産主義運動を弾圧されてきた歴史であって、決して祝福などできるも

四月二九日におこなわれた政府主催の天皇在位六〇年式典について、十一月十日を中心にして全国各地で奉祝式典や奉祝パレードがおこなわれようとしている。天皇ヒロヒトの在位六〇年とは、わが国の人民が天皇と国体護持の名のもとに、アジアへの侵略有貢され、階級闘争と共に産主義運動を弾圧されてきた歴史であって、決して祝福などできるも

奉祝行事が予定されている。

これらは日帝ブルジョアジーが天皇制（イデオロギー）を、人民内部に一層深く浸透させていくことをねらった今春の政府主催の中央行事につづく一大攻撃である。そのきわだつた特徴は、各地方で財界や民間諸団体が奉祝委員会を組織し、自治体の協力をとりつけ、さらには町内会有力者もとりこんで、いわば草の根運動的に準備されてきたことにあ

る。小・中・高校への日の丸・君が代の強制や奉祝行事への動員をもと

もなつてすすめられる各地方の奉祝行事は、天皇制（イデオロギー）のもとに広く労働者人民を組織していく

くという点では、今春の中央行事を上回る危険性をもつものなのである。

それではなぜブルジョアジーは、（イデオロギー）攻撃を強化しようとしているのだろうか。日本帝国主義をとりまく情況のなかにその根柢はある。

第一に、侵略反革命戦争への国民総動員をねらって、国民統合の支柱に天皇制（イデオロギー）をおしだ

していふことである。四月二九日の政府主催の奉祝式典で中曾根が、「国民統合の中心である大切な柱としてのお立場は変わることなく、陛下と国民を結ぶ敬愛と信頼の紐帶は

いよいよ固くなっている」と発言したなかに、ブルジョアジーの意図はよく示されている。ブルジョアジーは天皇制（イデオロギー）を再利用

するため、「天皇は平和主義者」、「終戦の御聖断を下して天皇は日本を救われた」などのキャンペーンを

やむやにし、天皇への「敬愛」や「親愛」の感情を人民内部に浸透さ

れるため……全国に率先して盛大に奉祝申しあげる」とその目的を述べている。そして東京と京都の行動を頂点にして、全国で網の目のような政治の総決算」こそ、こういった日

のではない。いやむしろ日本プロレタリア人民は天皇制と天皇制イデオロギー（以下天皇制（イデオロギー）と略す）の歴史的な反人

民性をこそ、徹底的に暴露していかねばならないのである。われわれは全国的にくりひろげられようとする十一月天皇奉祝式典・パレードにたいして、プロレタリア階級闘争の前進をかけて総対決するよう呼びかける。

帝の侵略反革命戦争とファシズムの準備をねらうものであり、中曾根が「八六年体制」と称する階級闘争抑圧構造の形成をはかるとするものにはかならない。「八六年体制」とは、総評を解体して労働運動の帝国主義的再編をおしすすめ、社会党を中心とした保守化させたうえでプロレタリア人民を民族排外主義に組織し、暴力装置である警察と軍隊を大増強して治安強化を一層強化しようとするものである。

こういった日帝ブルジョアジーの動向のなかで、天皇制（イデオロギー）攻撃を飛躍的に強化しようとす

る目的は、およそ次の点にある。

第一に、侵略反革命戦争への国民総動員をねらって、国民統合の支柱に天皇制（イデオロギー）をおしだ

していふことである。四月二九日の政府主催の奉祝式典で中曾根が、「国民統合の中心である大切な柱としてのお立場は変わることなく、陛下と国民を結ぶ敬愛と信頼の紐帶は

いよいよ固くなっている」と発言したなかに、ブルジョアジーの意図はよく示されている。ブルジョアジーは天皇制（イデオロギー）を再利用するため、「天皇は平和主義者」、「終戦の御聖断を下して天皇は日本を救われた」などのキャンペーンを

やむやにし、天皇への「敬愛」や「親愛」の感情を人民内部に浸透させ強めようとしてきた。

このんち日帝は、帝国主義世界支配の一角を強力に支える「国際國家」（中曾根）としての経済的・政治的地位を握るまでに成熟してきた。それゆえに日帝は、他帝国主義によって結成され、「京都は王城の地であり、平安建都千百年を迎えるため……全国に率先して盛大に奉祝申しあげる」とその目的を述べている。そして東京と京都の行動を頂点にして、全国で網の目のような政治の総決算」こそ、こういった日

のではない。いやむしろ日本プロレタリア人民は天皇制と天皇制イデオロギー（以下天皇制（イデオロギー）と略す）の歴史的な反人

民性をこそ、徹底的に暴露していかねばならないのである。われわれは全国的にくりひろげられようとする十一月天皇奉祝式典・パレードにたいして、プロレタリア階級闘争の前進をかけて総対決するよう呼びかける。

11月天皇奉祝式典・奉祝パレードを粉碎せよ！

しかしわれわれは天皇制が何か魔法のような統合機能をもつとは考えない。中曾根が「天皇の御在位六〇年を祝おうとしないものは非国民」と発言したように、あらゆる労働者人民のたたかいを暴力的な治安強化をもって根絶し、それを天皇のためなら何をしてもかまわないと正当化していくことこそをねらっているのだ。天皇制（イデオロギー）のもとでの国民統合とはこのような階級闘争のうえに、プロレタリア人民が強制的に侵略反革命戦争に動員されしていく状況を意味しているのだ。第二の目的は、天皇制（イデオロギー）を民族的・国家的利益の中心としてかつぎだすことだ。プロレタリア人民を民族排外主義へと組織することにある。日帝ブルジョアジーは全世界に広がっていく新植民地主義支配からの超過利潤を物質的根拠にして、プロレタリア人民に民族排外主義を注入してきた。そのうえで彼らは「天皇陛下の御存在いただいていることがどんなにありがたいことか、を一層深く論じ、明らかにしていくことこそ、正しい民族意識、正しい愛国心、世界平和の中で栄える日本国家の希求する道を見出すことになる」（京都奉祝委員会）など

のキャンペーンを組織し、天皇をして天皇を正當化した藤尾発言、あからさまな人種差別である中曾根の「知識水準発言」、つづく中曾根のアイヌ民族

わざである。民族排外主義育成の核として天皇制（イデオロギー）が登場してきているのである。

第三の目的は、右翼ファシズム運動を育成し、プロレタリア階級闘争と革命党建設を孤立化・解体してい

くことにある。四・一九式典では連日二万六千人の警官が勤務され、天皇護衛の名のもとで治安弾圧体制が飛躍的に強化された。一方で天皇主義右翼が革命的左翼への武装襲撃を活発化させ、他方で奉祝行事等も利

用しながら地域すみずみまでの治安管理体制も強められている。官民の暴力装置と諸々の社会組織を勤務して、天皇の名のもとにすべての反体制運動と革命運動への弾圧の強化が本格的に開始されている。

反天皇闘争内部の

チブル的諸傾向

天皇制（イデオロギー）攻撃との対決は、プロレタリア人民にとって決して看過できないばかりか、今後もますます重要な課題となるにちがない。にもかかわらず反天皇闘争をめぐる諸論争と混乱ゆえに、たたかいの立ち遅れ、非プロレタリア的見地の横行という否定的現状が存在していることを認めなければならぬ。それゆえ現状の反天皇闘争における過った傾向を批判し、プロレタリアートにとっての原則的たたかいを登場させることは急務である。

社会党は戦後憲法制定時、「新憲法要綱」で「主権は国家（天皇を含む国民共同体）に在り」「統治権は之を分割し、主要部を議会に、一部を天皇に帰属せしめ、天皇制を存続する」と提唱したように、天皇制存続・擁護の態度をとった。現在においても社会党は（象徴）天皇制には批判などなく、憲法での「政教分離」を根拠にしての「天皇の政治利用には反対する」という立場でしかない。

一方日共は現在でも天皇制廃止を標榜している。だが彼らは戦前の三二テーゼによる天皇制国家権力の階級的性格と革命戦略の過った規定によって、戦後プロレタリア人民を天皇制の前に武装解除させ、また民族民主主義革命戦略の導入によって天皇制との闘争を放棄してきた。三三テーゼは権力の性格を「主として地主そして寄生的封建的階級に立脚、他方でブルジョアジーに立脚」した天皇制絶対主義権力と規定し、「社会主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命」が革命の戦略とされた。これに依拠する

くことにある。四・一九式典では連日二万六千人の警官が勤務され、天皇護衛の名のもとで治安弾圧体制が飛躍的に強化された。一方で天皇主義右翼が革命的左翼への武装襲撃を活発化させ、他方で奉祝行事等も利

用しながら地域すみずみまでの治安管理体制も強められている。官民の暴力装置と諸々の社会組織を勤務して、天皇の名のもとにすべての反体制運動と革命運動への弾圧の強化が本格的に開始されている。

かぎり、戦後の天皇制は、米帝占領軍に主導された農地改革などの一連の諸改革によって、その成立根拠を失った過去の遺制とどうそられる以外のものではなくなり、日共は天皇制との闘争を実際上放棄することとなつた。

こんにち日共は社会党と同様、「天皇の政治利用反対」という立場をとっているにすぎない。現代の天皇制が、日帝ブルジョアジーの階級支配の道具である国家の支柱として登場し、プロレタリアート人民に民族排外主義を強要していることにたいして、日共は屈服・容認するままである。

天皇制は決して封建遺制でもなければ、一宗教というものでもない。天皇制は日本ブルジョアジーの階級支配の道具であり、プロレタリア人を民族排外主義の思想で教育し組織するための道具である。

それゆえ天皇制打倒のたたかいは、日帝ブルジョアジーの独裁権力を打倒し、プロレタリアートの独裁権力にとってかえる政治革命と不可分のものである。したがってまたわれわれは反天皇闘争を天皇制（イデオロギー）との闘争それ自身のなかにとじこめたり、あるいは天皇制の打倒を日帝打倒の水路など恣意的に規定し、天皇制（イデオロギー）との闘争に階級闘争のすべてを收れんさせていこうとするような傾向にも反対する。ブルジョアジーが天皇制（イデオロギー）を武器として民族排外主義のもとにプロレタリア人を組織し、階級闘争の根絶をはかり、侵略反革命戦争への総動員を準備しようとする攻撃を開始しない。民族排外主義への組織化に

用しながら地域すみずみまでの治安管理体制も強められている。官民の暴力装置と諸々の社会組織を勤務して、天皇の名のもとにすべての反体制運動と革命運動への弾圧の強化が本格的に開始されている。

根本的に対立するのは、全世界のプロレタリアートの解放にむけたプロレタリア国際主義である。階級闘争の根絶にむけた治安弾圧と「国民統合」に根本的に対立するのは、現在の国家をブルジョア独裁国家とからねばならないという現在の日本国家にたいする革命的批判であり、武装蜂起とプロ独を準備する革命的実践である。われわれは反天皇闘争をプロレタリア政治闘争として、すなわちプロレタリア国際主義と武装蜂起・

プロ独の準備へとプロレタリア人民を結集させつづけていくたたかいへと発展させていかねばならない。

しかし天皇制（イデオロギー）攻撃と、こうしたプロレタリア的見地からたたかうことのできない部分が、反天皇闘争の内部にもまた存在している。急進民主主義、右翼日和見主義諸派がそれである。彼らは天皇制（イデオロギー）との闘争をブルジョアジーの打倒と結びつけて主張する点では、社共とはまったく異なる。だが彼らは反天皇闘争をやっている。だが彼らは反天皇闘争をプロレタリア政治闘争と結合できず、国際主義と社会主義革命の道へ人々を結集させつづけていくたたかいと反天皇闘争を切斷するという点で、社共と同根の誤りにおちいつている。

急進民主主義者は、天皇制ボナバルティズムへの転換とたたかい峰起戦に起てと主張する。これは天皇制の階級的性格をブルジョア独裁権力の道具としてとらえることができず、天皇制の強化を強権性、民主主義的権利の破壊、反動攻勢の一面でしかとらえきれず、したがって人民の戦後民主主義擁護の危機意識に無批判的に依拠し、その徹底化急進化をすべてとするものである。このようないい非プロレタリア的見地からでは、人民を国際主義と社会主義革命に導いていくことはできない。

他方、右翼日和見主義者のなかには天皇制（イデオロギー）をブルジョア独裁の道具ととらえる立場を一般的であると批判し、天皇制の国民統合機能と、國家権力を民衆の側から支えるという「内なる天皇制」をとらえなければならないと説く部分がいる。天皇制が何か魔法のような国民統合機能をもつものではないことはすでに述べた。国家権力による階級闘争の根絶にむけた治安弾圧が

天皇の名によって正当化されることによって、プロレタリア人民が天皇制のもとに強制的に屈従させられる状況がつくられるのだ。そしてこれを右から支えていくものとして右翼ファシズム運動が存在しているのである。彼らは天皇制（イデオロギー）との闘争を没階級的な思想問題に迷いこませ、反天皇制闘争を階級闘争の発展、前衛党建設から切斷する反動的役割をはたしている。さらにはたしていることが厳しく批判されねばならない。

われわれは反天皇闘争をめぐるさまざまな小ブル的誤りを克服し、反天皇闘争をプロレタリア政治闘争として発展させていかねばならない。そこで、支配階級が被支配階級を抑壓・支配するための暴力装置であるを歪曲し、プロレタリア人民を暴力革命の思想から遠ざける役割をはたしていることが厳しく批判されねばならない。

（国家は階級闘争の非和解性の産物であり、支配階級が被支配階級を抑壓・支配するための暴力装置である）を歪曲し、プロレタリア人民を暴力革命の思想から遠ざける役割をはたしていることが厳しく批判されねばならない。

すべての労働者人民諸君！わが國（全国委）は十一月天皇在位六十周年式典、奉祝パレードにたいして以下の実践的任務を提起し、ともにたたかうことを訴える。

第一に、十一月式典・パレードへの右からの大衆動員や日の丸・君が代の強制と対決し、天皇制（イデオロギー）攻撃の強化を、侵略反革命戦争と前衛党建設の破壊にむけた基軸的攻撃として暴露しきり、広範なプロレタリア人民の決起をつくりだすことである。

第二に、嵐のよき民族排外主義、日本民族優性思想の宣伝と対決し、プロレタリア国際主義のもとにア階級闘争と切斷する小ブル的誤りとたたかい、武装蜂起・プロ独にむけたプロレタリア人民を結集させていくことである。

第三に、反天皇闘争をプロレタリア階級闘争と切斷する小ブル的誤りとたたかい、武装蜂起・プロ独にむけたプロレタリア政治闘争へと変革することである。

第四に、式典・パレードの警備と称する国家権力の治安弾圧、さらに右翼ファシズム勢力の武装襲撃・街頭制圧をうち破るプロレタリアー

れないとする攻撃を開始したい

ではない。民族排外主義への組織化に

●旧支配層の 反日運動

琉球置県の翌年の一八七一年明治五年)、明治政府は琉球国をあらためて日本の一藩とし、国王尚泰をその藩王とした。それは琉球处分を



第三回 たたかいの歴史 (1)

琉球処分・旧慣温存 政策下で激しく揺れ 動いた沖縄社会

抵抗を開始した農民たち

維新は、島津侵略以前の姿に琉球が
かえることだ、という期待すらもつ
てこれを迎えた。

的な日・中・琉関係にたいする土族の心情をあらわすものでもあった。 「トウ ヤ サシガサ、ヤマトー ンマ、ヌ チマグ、ウチナーャ ハアイ ヌ サチ」（唐は差し傘、日本は馬の蹄、沖縄は針の先）といふことわざがある。仲介貿易の出先として形式的な冊封関係にあつた中國の、琉球王朝にたいする鷹揚さ、片や薩摩（日本）は貪欲な収奪者であり、「清国のとがめは弁明できるが、薩摩の譴責は一片の紙きれでも

琉球王朝の士族たちの反対運動をもたらすので保護するというのである。それは琉球王朝の支配層を大きく動搖させ、士族たちの反対運動を引きおこした。旧態依然の状態をそのままの「神だのみ」を国をあげておこない、清国からの救援を待ちのぞんだ。

今回から沖縄のたたかいの歴史へと入っていく。今回から数回に分けてとりあげるのは、琉球廃分（一八七九年）前後から沖縄戦までの鬪争史である。それは世界の資本主義の抗争と野望のただなかに、琉球王朝の消滅とともに暴効的に投げこまれた沖縄の民衆が、当初は封建士族の領民として抑圧民族（日本）と被抑圧民族（琉球）の支配者階級間の抗争に付随する存在から、徐々にたたかいの主体へと成長していく過程である。この時期の沖縄における階級攻防は、日本の支配者階級（その出先機関としての県庁）、沖縄支配勢力（かつては首里王府であり、のちにはその一部が沖縄の地方ブルジョアジーとして転身していく）、そして労働者大衆（最初は封建制下の農民が大半であるが、日本資本主義が沖縄を包摂していくにしたがつて分解していく）という三つの勢力がからまりあいながらくくり広げられている。その歴史を整理する立場にはさまざまなる説があるが、民衆のたたかいの発展段階を科学的によらえていくことにこの稿の目的はおかれている。沖縄労働者人民の大規模で本格的な立ちあがりは、戦後を待つことになるが、戦前の歴史はその前史としてさまざまな重要な示唆をわれわれに与えてくれる。

「亀川党」（前三司官、亀川親方盛武の勢力）を中心とする反日運動は激しく、明治政府を恐れて屈服の命令を下そうとした藩王の使者をつるしあげてこれを阻止したり、藩王の側近が「邪議を獻じて」藩王を感じわしていると、その家をうちにわして島払いにしようとしたりしてい。ついには日本への嘆願が到底通じないとみるや、清国に密使を送つて助けを求めている。

しかしアジアにおいていち早く資本主義への道を歩みはじめた明治政府の強権的国家意志の前に、これらはねじふせられていった。一八七九年（明治十二年）三月二七日、琉球沖縄県とされ、日本の一県に組み入れられた（琉球処分）。

だが旧藩士たちの反日運動は、以降も日本政府・県庁にたいする不服従・非協力運動（こうくわんりょく）が続いた。

學習資料

沖縄87年闘争の勝利にむけて

ゆるがせにできない」（尚敬士、一七一三（五一年））という薩摩対策の遺訓を残させるほどの強権的支配者であった。

社会の多様な反応をどう評価するのかには、いくつかの説があるので紹介しておく。

一つは琉球処分反対、不服従運動は、旧支配階級だけのもので一般民眾とは関りのなかたもの、とみる説である。それは「人民が琉球処分に反対したとはいらず、客観的にはむしろ二重の収奪からの一種の解放を意味した」（比嘉、霜多、新里共著「沖縄」）といふものから、「一般農民たちは一見無表情で事態のなりゆきを見守った」（金城正篤）といふものまで幅がある。

これにたいするもう一つは、「私は人民が併合に反対したと推定する。武力をまったくもたないじく少數の王族、上級士族が民衆の積極的・消極的支持なくして、どうしてあれだけ抵抗できよう」（岩波講座「日本歴史」第一六巻「沖縄と北海道」という井上清の説である。

そしてほかにも「沖縄の民衆が己を解放するための沖縄の日本併合

●農民の 反封建闘争

琉球処分後の沖縄には、日本併合にあくまで反対するいわゆる頑固党と、新政府に妥協したいわゆる開化党という旧士族の勢力があつた。頑固党は「クルー（黒）」と呼ばれ、開化党は「シル（白）」と呼ばれていた（これらの分類には諸々の説がある）。党とはいっても近代的な政治結社政党ではなく、それは村落共同体的な地域集団を単位とする勢力の総称であった。

頑固党と開化党の対立は激しくなり、日清戦争時に頑固党の反日運動が活発化する一方で、沖縄人子弟の「義勇団」は日本の寄留商人や県官たちがつくった武装集団「同盟義会」とともに軍事訓練をおこない、また琉球新報は親日排清キャンペー

ンをくりひろげた。

農民は疲弊していた。それは旧王朝時代の租税制度、土地制度などによつてもたらされたが、旧慣温存政策は農民たちの生活状態をすこしも改善するものではなかった。ある県の役人はこうした農民の状態をさして、「平民といえはただ租税上納の器械の如く認められ……」（依参考官「沖縄県税制改正の急務なる理

由」と表現するほどであった。

農民たちのたたかいは、まず村吏、地方役人層が租税や公費の徴収にさいして、その地位を利用して働く不正行為にむけられた。一八八一年五月、粟国島では村吏の不正行為に怒った民衆数百人が村吏の家を襲つて金品を奪い、暴動をおこした。

翌八三年、本島北部の名護間切屋部から離れた地域での、実力による叛逆行為として爆発したが、いまだ多くの民衆は役人層の権力を恐れていた。にもかかわらず旧慣制度にたいする反抗は、琉球処分以降急速に高まつていき、各地で農民の集団的な告発や請願が頻発した。

日本政府は旧慣温存政策を固持するため、これらを鎮圧しようとしたが、地方役人層の腐敗への批判からはじまつたたかいは、やがて封建的諸制度そのものの打破を要求する運動を生み出していく。その代表的なものに宮古島人頭税廃止運動（一八九二年）がある。

人頭税とは宮古・八重山の農民を三百近くにわたって貧困のどん底に落し入れてきた悪税である。それは実際の生産高より過大に見積もられた検地の石高によって決められた定額を、貧富の別なく頭割りによって割りあてる「年租」と、土族は軽失つて消滅していく。だが琉球処分をめぐる社会的変動は、かつての封建的な支配層の圧政にがんじからめられた。そのため「なすすべを失つた島民は墮胎、自殺、脱村、山賊など」（「八重山歴史」）に追いこまれ、島庶民史」といわれる。

人頭税廃止運動は島役所や県庁当局への請願から開始されている。「はじめは人頭税、物品上納を廃して、財産の多寡による金銭租税を請願したがだめだった。それではと上納輕減を請つた。それも出来ないとねつけられた」と「隠れたる偉人」（運動の指導者の一人であった城間正安の伝記）はのべている。一八九三年、請願のうちの一部がとりあげ



宮古島風景。沖縄本島の西南約三百キロに位置している。

農民は猛烈な反発を引きおこした。いつたん実施されようとしたわずかばかりの改革は、これによってたちまちくつがえられ、のみならず農民の負担はいっそう重くなつた。

これらの経過をへて運動は、国会への請願へと踏みだしていったのであるが、注目すべきことは県庁（当

年の知事は余良原繁）の激しい弾圧と優柔にもかかわらず、農民の戦闘的エネルギーと結束の固さはゆるがなかつたことである。国会請願の運営資金をつくるため、ある者は畑を

売り払い、ある者は貢納の栗を番所の倉から盗みだし、獄に入れられながらなお勤じず、また「人民は二五年度（一八九二年度）の貢租公費を納めず、その未納の貢米八百俵を送納の途中で売り払つて代表上京の費用にあてた」（仁尾主税官「復命書」）というのである。

たたかいは十数年におよび、国会請願が二度三度とくり返され、議会も「軍事上、国防上の要衝な島を打棄て置く」というは實に得策ではない」（「沖縄県政改革建議案」）といふ理由から請願を採択し、政府も

六年から開始された県政改革において、一九〇三年、土地整理（地租改正）が実施され、前後して人頭税は

ようやく重い腰をあげた。一八九六年は、宮古島人頭税廃止運動は、封建士族の領民であった農民が、封建的諸制度にたいするブルジョア的改良運動の担い手として組織だって登場したこと、沖縄近代史に刻みつけたことを、歴史的たたかいであった。

宮古島人頭税廃止運動は、封建士族の領民であった農民が、封建的諸制度にたいするブルジョア的改良運動の担い手として組織だって登場したこと、沖縄近代史に刻みつけたことを、歴史的たたかいであった。

られた。ところがこの請願は旧士族の猛烈な反発を引きおこした。いつたん実施されようとしたわずかばかりの改革は、これによってたちまちくつがえられ、のみならず農民の負担はいっそう重くなつた。

化の道を開く有罪判決を弾劾しなくてはならぬ。このようないいふて、三里塚闘争は、東峰十字路裁判判決公判が千葉地裁でおこなわれた。

千葉地裁は、検察のデッヂ上げ起訴の根拠となっていた自白調書をすべて「信用性がない」として却下し、「三警官殺害」の実行行為は特定できないとして三名を無罪、五十二名に全員執行猶予の判決を下した。また判決理由のなかで、「新空港の建設は位置決定の当初から問題をはらみ、地元農民の理解と協力を求めようとする姿勢が必ずしも十分であつたとは思われない」と、空港建設の問題点にも触れるなど、三里塚闘争のなかでは異例ともいえる判決であった。

しかしながら許しがたいことに判決は、東峰十字路裁判の直前におこなわれた県有林での会議によって共謀が成立し、傷害致死の責任を追及できるとしており、さらに許しがたいことは、この県有林での会議に参加していなかつたメンバーについて、会議の内容を知らないても、全体として行動をともにし、意思を通じていたから共謀が成り立つとしているのである。このような、弾圧強化の道を開く有罪判決を弾劾しなくてはならぬ。

有罪判決弾劾

10・4

三里塚東峰判決公判



てはならない。

この日、千葉地裁には早朝から一〇〇人が傍聴券を求めて列をつくり、地裁を包囲した。九時半、全員のシユプレヒコールで被告団を送りだした後、千葉市中央公園で集会がおこなわれた。十時半に「全員執行猶予」の第一報を受け、その後続々

と公園にもどってきた被告団、弁護団を囲んで、重刑攻撃を粉碎した意義を全体で確認した。そして二期阻止空港粉碎の新たな決意をうち固め、三時からの市内デモを戦闘的にたたかひぬいてこの日の行動を終えた。

今回、反動的な有罪判決ではある。この攻撃にたいし反対同盟と支援連は、連日の抗議・監視行動をおこない、十月九日、十月十九日に緊急現地集会・デモをおこなつた。この攻撃にたいし反対同盟と支援連は、連日の抗議・監視行動をおこない、十月九日、十月十九日に緊急現地集会・デモをおこなつた。

十・四東峰判決を一ステップとして、ただちに二期阻止実力決起かちとれ。

52名に執行猶予つき徴役・有罪判決

たが、懲役一〇年求刑の四名をはじめとした検察の大量重刑デッヂ上げの野望はうち碎かれ（この日検察は収監を予定して二〇個あまりの手錠を用意してきていた）、一人も獄中に奪われることなく反対同盟の組織防衛がかちとられた。これはほかでもなく、三里塚闘争二〇年間の、反対同盟と全国の労働者人民の、軍事空港粉碎、労農連帯、実力闘争を掲げた不屈のたたかいの成果である。この政治地平をさらに防衛・発展させ、日帝打倒・社会主義革命をめざすプロレタリア階級闘争の一翼へと三里塚闘争を飛躍させねばならない。

この局面にあって権力・公団は、

九月二六日、成田用水三号工区（空港排水路建設と結びついた二期工事そのものの性格をもつ）のぬきうち着工を、七五〇〇の機動隊を動員して強行した。また十月六日には、二期工事の警備用の駐車場工事が天神峰、横堀、木の根でいつせいに開始された。この攻撃にたいし反対同盟と支援連は、連日の抗議・監視行動をおこない、十月九日、十月十九日には緊急現地集会・デモをおこなつた。

十・四東峰判決を一ステップとして、ただちに二期阻止実力決起かちとれ。

全国学生共同闘争に起て

運動と対決する全国の戦闘的学生の共同戦場である。またそれだけでなく日大闘争は、ファシズム

学生運動とのたたかいを、日帝の侵略反革命戦争と

ファシズム準備とのたたかいといふ政治闘争と結合

させてその発展をかちとつてきた。さらに、反対連の「天皇のためにたたかい死ぬ」という反革命的

決意にたいし、革命的學生運動の側が、プロレタリ

ア階級の利益とプロレタリア共産主義革命の未来に

しっかりと立ちきれるか否かをめぐる党派闘争の戦

に全力で決起せよ。



攻撃との闘争を強化することが求められる

ている。

全国の学生は、今

秋反天皇闘争への決

起と対反対連闘争

をひとつのものとし

て、十一・一八闘争

に全力で決起せよ。